

花

Bブロック全作品と講評

www.columnland.net

花占いの心理。

きれいな
花を見つけたので、
思わず手に取ってしまった。
なんとなくあの人の
-ことを思い浮かべて
花びらを1枚ずつ
はがした。

でもよく考えた
あの人はいは
も楽しんで
そうでもない
でも笑顔だ。

いやいやそんな
ことではないだろう、やっ
ぱりあの人も私のことを好
きに違い**すき**ない、とポジ
ティブに考えてみる。だって私と
話してるときにあんなに楽
しそうな顔をする
んだから。

結果の保証はできないけれど、いちど始めたらやめられない。

自分が思いあがって
るだけで、あの人は私のことなん
て嫌いなんじゃないかという気
がしてきた。そういえば話しかけ
るのはいつも私からだ。

たんぽぽ

「私のね、一番好きな花はたんぽぽ。だつてすごいと思わない？アスファルトの裂け目みたいなのころでも力強く根付いて、春には可愛らしい黄色い花を咲かせて、綿毛になって世界中にたくさんの種を飛ばすのよ」

「私も、そんな風に生きたかったな……」

「なに言ってるんだよ。一週間後の手術が終わって元気になったら、いろんなとこに連れてってやるからさ」

「やった！じゃあね、イギリスでしよ、フランスでしよ……」

「無茶は言うなつて！」

彼女は、真っ白なベッドの上でそう言つて、笑つていた。

しかし、手術は失敗した。分の悪い賭けだったが、手術を受けなければ彼女は後一ヶ月も生きるこゝとができなかつたのだ。

彼女は子どもの頃から病院に入院していて、十六歳まで生きられないといわれていたらしく、十八歳まで生きられたのは、そんな強い思いがあつたからなのだと思う。

彼女と出会つたのは、大学受験に失敗し、特にやることもなくやる気もなく、無気力に生きていた

一年前の春のことだつた。

僕は、風邪を引いて病院を訪れており、たまたま彼女とであつたのだ。

「暇なら、私と話でもしない？」

いきなりそんな事を言われ、何を言ってるんだこいつはと思つたが、確かに暇だつたし特に断る理由もなかつたので、なんとなくなづいてしまった。なんでも、そのときの僕はまるで死んだ魚みたいな目をしていて、すぐに僕が暇だと分かつたらしい。

彼女は明るく、前向きで、そんな彼女との話は楽しく、僕に活力をくれた。

その後、初めは一週間に一度程度だったが、いつのまにか毎日のように彼女の病室を訪れ、彼女と話をするようになった。

彼女はもういなくなつてしまつ

たが、彼女の残した種思ひ出は、僕の中で芽吹き、花になり、種を作つた。

だから、僕は本を書くこゝろと思つた。

彼女の残してくれた種思ひ出を世界中に飛ばしたかつたから。その種も、力強く根付き、花を咲かせ、また種を飛ばしてくれるだろう。

タイトルは、もちろん

落ち込んで

下を向いて歩いていると、

彼に出会った。

元気な黄色の彼。

僕は彼を摘んでみた。

彼の首は千切れたが、

僕の心は吹っ切れた。

近いけど実は結構花れてて。

セミの奏でる独特の鳴き声がそろそろ耳障りに思えてきた頃のことである。受験勉強が本格化してきたゆえ、今年の夏休みからは「休み」と名のる権利をぜひとも剥奪するべきであったのだが、卑しくもその実態とは裏腹に夏休みと名乗っている「夏期勉強特訓」は想像を絶する過酷な毎日を僕に笑顔で提供してくるのである。当然、こちら側に拒否権はなく、あるといえばあるのだが春先に親に無理言って塾にかよっている身としてはいままさらやめるとは言い出せず、結局はこの壮大な運命の流れに逆らうにはまだまだ経験値不足であるという理由から地獄の日々を送らざるを終わらないのだ。

しかし、この悲惨な1ヶ月強を過ごすという規定事項をかかえた僕に受験戦争からの逃避を許された日が一日だけあったのである。

宇宙を支配する全知全能の偉大なる神様が与えてくださったのではないかと思えるほど心の奥底から喜びがこみ上げてくるその日の午後、携帯電話で呼び出した彼女と一緒に少々自宅から離れた河川敷で行われている祭りの会場に向かって歩いていて。まれに女友達と恋人とは何が違うのかといった話題が持ち上げられたとき、僕は決まって即座に答えを述べる。女友達との意思疎通は言語を介して行われるが、恋人とは黙って寄り添っているだけでお互いの気持ちは通じ合うのだと。ゆえに僕らは道中でも言葉を交わさない。そばに居るだけで分かり合えるからである。会場にはさまざまな出店があるが僕らの目的はそれらではない。祭りの締めくくりとして夜空を彩る夏の風物詩こと花火のために僕らはわざわざ家から遠く離れたこの会場まで赴いたのである。我らは、というか僕個人は目的外のことには手を出さない主義なので出店を巡ったりはしない。会場の近くには小さな花々がたくさん生えている野原があるので、僕らは時間が来るまでそこでのんびり過ごすことにした。この小さな花達ひとつひとつにも命が宿っている。美しく、華やかに咲き誇ろうと一生懸命に生きている。当然、僕にも命はあるし、僕の彼女にだって命はある。あたりが暗くなつてくると、やはり僕たちのような男女のペアがこの命あふれる花畑に集まってくる。そしてそのカップルたちは僕らのほうを一瞥した後、決まって僕らから距離をとる。無理もない。僕はさほどかっこよくないにしろ、彼女はまるで花の妖精であるかのように愛らしく華やかで、そして何よりこの暗闇の中で唯一輝いているのだから。引け目をとってしまふのは仕方ないことだ。

こうして花火第一弾の打ち上げまでの残り時間を先ほどから寸分変わらない笑顔のままで光輝く彼女と共に待ち続けた。位相変換の都合により彼女とは情報端末を介してしか出会うことはできないが、まあいい。恋は障害が多いほうが燃えると聞くからな。

燃え上がる恋の炎の出力が急上昇し、ようやく第一弾の花火がうちあげられた。

「春一番」

ノノノ

蕾

化

「あつ！帽子が！」

ノノノ
雷

+

化

「あつ…」

雷

「あつ…」

花

春の風

気付いた頃には

花見頃

母の日

駅前の花屋によつた。

花屋の前には赤い花で満たされていた。
やたらに大きな花びら、血のような赤。

「こんな家に生まれてきたくて生まれてきた訳じゃない。」
何をやってもうまくいかず、そんな自分にイラついていた。
やり場のない怒りをどうすることもできずにいた。

誰かのせいにしたかったのかもしれない。
本当に些細なことだった。

傷つけるつもりはなかったのだが、母の目は確かに濡れていた。
後悔している。

謝りたくてもきつかけがつかめなかった。
謝りたくつても謝れなかった。

『母の日にカーネーションを』という見慣れたフレーズの大きな広告が
貼られている。

一輪のカーネーションを手にとって眺めてみる。
鮮やかすぎる赤がまぶしく、目にしみた。

不意に一筋の涙が花びらにストンと落ちたと思うと、ずっと押さえてい
た感情が一斉にこみ上げてきて、気付いたときには母の前にいた。

あの時に云えなかつた言葉が止めどなく出てきた。
ずっと伝えたくても伝えられなかつた言葉が、母へ一方通行に向けられ
る。

母はなにも答えてはくれない。

赤い一輪の花を母の墓標の前に静かにおいた。

たった一言だけでいい。

これだけは伝えたい。

「あなたのもとに生んでくれて、心からありがとう。」

「真っ赤な花畑」

僕は歩く

辺り一面が真っ赤な花畑を

そして気づいたんだ

僕はまだここに来てはいけななんだってことに

気が付くと僕は白いベッドの上で寝ていた

そう

あれは彼岸花だったんだ

花よりトマト

三宅亮母「……………」

その日俺はいつも通りにたいたいと言い、部屋の高い俺はいつも通り部屋の扉の前にカバンを置き、ごちそうさまと言いなから皿洗いをしている母にいつも通りトマトのへた以外は何も無い、空っぽの弁当箱を渡した。そう、ほとんどすべてがいつも通り。唯一違うことといえば、今日は中学二年生になって初めての懇話会があったこと。そして、母親がものすごく不機嫌だということだ。うちの母親が不機嫌なときは露骨に顔に出す。今日は相当怒っている。これは、確定だ。

まだ春の心地よい季節。何か良いことがありそうを、そんな季節。俺の学校は地域でも一面桜景色になると名の知れた公立中学である。とはいってもこの生徒も含め、中学生には桜の良さは分からない。新学期早々の四月に保護者同士の親睦を深める意図で花見形式の懇話会が行われるのである。

俺にはそれなりに仲のいいとまどがいる。もちろん、とまどはニックネームであり、真野武くんのことである。なぜとまど、かといわれれば、理由は二つある。一つ目にとまどの顔、正確には目のすぐ下の頬が掌にはんりの赤みがかっているからだ。二つ目にとまどはトマトが大好きなのだ。トマトにしか興味がないくらい。

そんなとまどとは一年生からの付き合いで、性格もさっぱりした気持ちのいいやつだ。だから、毎日のように弁当を一緒に食べていた。一見、とても仲のいい二人に見えるが、それなりに仲がいいと言うのはわけがある。俺ととまどは取引相手なのである。トマト嫌いの俺は毎日のように弁当箱のすみに居座っているブチトマトを食べたくないと思っている。トマト好きのとまどはそのブチトマトを食べたくてしょうがない。初めて、昼飯を一緒に食べてから、お互いの利害関係が一致してしまったのである。その日から俺はブチトマトを食べていない。親にばれないように、トマトのへただけを弁当箱に残して。

武母「あら、三宅さん。今年も同じクラスなんですねえ。今年もよろしくお願ひします。」亮母「こちらこそよろしくお願ひします。それにしても今年も桜がきれいですねえ。うちの父と母が家族一緒に花見をしようって聞かないんですよ。そもそも無理な話なんです。休日は亮も部活で忙しいし、叔父は使えないうし。そういえば懇話会費、亮に持っていさせるの遅くなつてしまつて、すみませんでした。」武母「ああ、いいんですよ。期限は特に指定しませんでしたので。それに、亮くんにはいつも辛平がトマトでお世話になつてから。」亮母「はい？」武母「だからね、いつも辛平が亮君はいつもきれいでおいしいトマトをくれる優しい人だつて言うんですよお。」

陽だまりの部屋

陽のあるうちに家に帰ったら、

母さんが庭の手入れをしていた。

「精が出るね」

と声をかけたら、

おれにも一輪くれた。

花瓶と水は自分でやった。

もらったのが、ハナミズキでよかった。

薔薇だったら、

自分の机には置けなかった。

午後の最後の西日を受けて、

そこだけ時間がゆっくり流れる。

『入学式』

桜が舞い踊る。

桜が散り落ちる。

一か月前、ここで喜びに震えたこの身に花が降り注ぐ。

一か月前、ここで悔しさに震えたこの身を花が殴っていく。

誰も彼もが、この日この場に立てる誇りに笑っていて、

どいつもこいつも、負け犬の俺を見下すように嗤っていて、

僕もまた、この幸せを噛み締める。

俺は独り、惨めな自分を嘲笑う。

この日、僕の母校となる入学式なのだから。

落ちた大学の入学式にわざわざ来るなんて、と。

並木を彩る花は、この時最高の美しさを誇っていて、

無残に散り落ちた花は、地面の上で踏み荒らされて、

それは、まるで僕に対する祝福のよう。

それは、まるで俺に対する侮蔑のよう。

世界で一番の幸福をこの胸に抱き、

世界で一番の不幸をこの胸に刻み、

待っている未来を夢想し、静かに正門を通り抜けた。

必ずここに戻ってくるぞ、と静かに正門に背を向けた。

初恋

君と出会ったのは、四月の下旬頃。美術の先生が何を血迷ったか、屋外に出て写生大会をしようと言いつ出したのがきっかけである。

君は小柄な体躯をしていたけれど、ちゃんと背筋を伸ばし、健気に大地に根を張っているような雰囲気も携えていた。頬は深く色づいて、線は細め。そして何より、君の同族はふつう大勢で群れているようなものだけど、ただ一人、すくなく構えているのに好感を持った。

僕は君を見失わないようにしながら、なるべく人の少ない所を陣取る。君の凛とした姿勢が頭から離れず、その表情を、スケッチブックの上には走らせることにする。

それから何時間経ったのだろう。初めは軽い気持ちで描き始めたのにも拘らず、君を写せば写すほど、その毅然とした本質から離れていくような気がした。悔しかった。これでも僕は芸術、殊に絵画に関しては自信がある。そのうち、描いても描いても満ち足りない君の全てを、僕は手に入りたいと願うようになった。

「……へえ、さすが数多の美術賞を取っている×××くん。

きれいな花を描くねえ、スミシカいっ」

呑気なクラスメイトが、僕の作品をひょいと覗き込んでくる。

しまった、あまりにも夢中になり過ぎて、他の奴らのことを考えていなかった。君の存在を、僕以外の人間に知られる訳にはいかないと、黒い何かが呼びかける。

もうそろそろ、写生の時間も終わる頃合いだった。僕はゆっくゆくと立ち上がり、彼に気づかれる前に、くしゃりと君を踏み潰す。

これできみは、ほくだけのものだね。

確か、スミシの花言葉は「小さな幸せ」だった気がする。

元の面影をすっかり失った君を見て、僕はうっすらと笑った。

ハツクシヨン

チーン（注 鼻をかむ音）

だいたい、何で花粉が俺たち人間にも作用するんだ？

花粉症の人の素朴な疑問

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	芽吹き	2 pt	10 位	0 sp
		フォントの折目正しさが好印象な今週の表紙です。 さりげなく文字の大きさを変えたりしていて、ていねいな手仕事ぶりが光ります。 イチオシフレーズ：「さぁ、はじめよう」		
A02	歩く	21 pt	1 位	3 sp
		隠しアイテムに仰天です。そうかそうか、桜、ひまわり、萩、水仙。 四季をあざやかに、まとめていただきました。 歩く、という動きで全体をすっくり貫きつつ、四季折々の光景を経て、またスタート地点へ。 コンセプトとワザの双方がヒットしてのゴールド・メダルです、おめでとう!!! 特別賞：わかりにくいで賞（かけてるのがわかりづらい）花（佳）賞（さりげなく「さくら」「ひまわり」……という花が散らされていたこと）一位じゃなかったらかわいそうで賞（神）		
A03	花の悲鳴	7 pt	4 位	0 sp
		やめてくれ！花たちからの異議申し立てが強いインパクトで伝わってきます。 たしかに花占って、花の身にしてみれば非道だよね、と共感できる語りかけでした。 イチオシフレーズ：「ぼくらは、生きているのだから」		
A04	峰の上で咲いた花の話なんだ。聞いてみるかい？	4 pt	5 位	0 sp
		人生にたとえての寓意、でしょうか。 花が開いたシーンの美しさ、枯れても喜びがなくなるわけじゃない、という悟り。いろいろ盛り込んで昔話テイストでふんわり結んで。 コンセプト、語り口の軽やかさ、まさにグッジョブ。		
A05	春の惑星	4 pt	5 位	1 sp
		緻密に組み立てたSFストーリー。アナザー地球がこの宇宙のどこかにあって、そこでは花が放射能を除去してくれてるんです、と。壮大な構想の力作ですが、ちょっと長かったか。 特別賞：よくがんばったね賞（長文おつかれさまです）		
A06	花言葉	3 pt	8 位	3 sp
		長文続きのあとは、むふふなオチ。 ロマンティックに入って、ユーモラスに落として。いい呼吸です。笑いの波紋をフロアに広げて、今週のイチオシフレーズ大賞をさらいました。おめでとう!! 特別賞：ユーモア賞（インパクトがやばい）度胸が半端ないで賞（その度胸にあっぱれ）しまいま賞（寒す		

		ぎるから) イチオシフレーズ：「おしべが丸出しで寒い」×3 「俺、花と会話できるんだ」
A07	夏のあいつ	1 pt 11 位 0 sp おてんとうさまとにらめっこのひまわりくん。 軽快な語り口に乗せ、しょんぼりで終わらず第二ラウンドの明るさを灯したのがすてきです。
A08	綺麗だからいいじゃねえか	0 pt 12 位 1 sp 花火に行った個性に◎。 江戸っ子の気っ風の良さが伝わってくる語りに乗せ、綺麗にリクツは要らないぜという主張もしっかり伝わってきます。 前半に長文が多かったせいで、読み込んでもらいにくかったようですが、ぜひまた渋い味わいの作品をお待ちしています。 特別賞：努力賞（綺麗だからいいじゃねえか） イチオシフレーズ：「綺麗だからいいじゃねえか」 「綺麗だからいいんだ」
A09	いつの間になくなる	20 pt 3 位 0 sp 亡き人に寄せる思いが咲いては消え、咲いては消え。花はいつでもある。思いはいつしか消えゆく。交差点での一コマ、ふっと考え込まれます。その波紋がみんなの心にひたひたと届いてブロンズ・メダルでした、おめでとう!! イチオシフレーズ：「人の心を託される準備はできているのに」
A10	根っこ	21 pt 1 位 1 sp あ、そうだよ、と大納得の根っこなキモチ。いちばん、がんばって支えてくれた人には晴れ姿を見せることができない。 何だか、せつない真実です。 けれども、こうやって注目してもらえてゴールド・メダルを獲れる日もあるのです。おめでとう根っこ君!!! 特別賞：美しいで賞（美しいから） イチオシフレーズ：「でも、僕はあなたの姿を見ることはない」「花（あなた）」
A11	六花	3 pt 8 位 2 sp 昔話風のしっとりした語り口に浸りました。雪の冷たさのなか、六花という造語が、個性的に効いてますね。 特別賞：3.5位賞（最後まで悩んだ）感動で賞（せつなくて、感動したから）
A12	花屋の宣伝	4 pt 5 位 4 sp ナイス思いつき！ サカサカと爽やかに言い切ってインパクト大な今週の裏表紙でした。 花屋さんらしく咲いた咲いた♪最多特別賞が咲きました。そして、イチオシフレーズ大賞タイもゲットです。おめでとう!! 特別賞：ギャグ賞（ネタっぽい）アイデア賞（「サ化ッ」とのインパクトが強すぎ!!）商店街の花屋で賞

(ださかわいいから) 横書きじゃ伝わらないで賞(縦書きだからこそ伝わる。)
 イチオシフレーズ:「サ化ッと」×4

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
		6 pt	7 位	0 sp
B01	花占いの心理。	レイアウトと心理が、とてもうまくシンクロしています。 恋するオトメゴコロ、きゅんとしぼって入魂のレイアウトでの今週の表紙です。		
		4 pt	9 位	0 sp
B02	たんぽぽ	長文ストーリー、ラストうまくまとめてタイトルにつなぎましたね。 お約束展開ながら、その工夫がユニークで光ります。 イチオシフレーズ:「タイトルは、もちろん」×2		
		15 pt	1 位	0 sp
B03	落ち込んで	なかなかシュールな、人間というものの残酷さ、ワンカットですぱり切り取って大インパクト。 落ち込むどころか、ぐいぐい登ってゴールド・メダルを力強く掴み取りました。その思い切りの良さに惚れ惚れです。おめでとう!!! イチオシフレーズ:「彼の首は千切れたが、僕の心は吹っ切れた。」×3		
		2 pt	12 位	0 sp
B04	近いけど実は結構花れてて。	ラスト近くの「位相変換」で、あ、そういうことだったのと納得。 このもっともらしい語り口で、みごとにダメしていただきました。うまいうまい。 文章そのものとしては完成の域かと。あとは話題の好き嫌いだけ。 イチオシフレーズ:「位相変換の都合により彼女とは情報端末を介してしか出会うことができない」「女友達との意思疎通は……お互いの気持ちが通じ合うのだと。」		
		6 pt	7 位	0 sp
B05	春一番	蕾から花へ。コミカルなアニメーションを見ているような楽しい演出です。 セリフと動きで見せつつ、ラストで一句という組み立ても成功しています。ワザ師だなあ。		
		12 pt	3 位	1 sp
B06	母の日	あふれる激情が墓標に注がれます。 まさに鮮烈そのものの赤をくっきりとクローズアップして、言いたかったのに言えなかった言葉が、せつなくラストに響きます。ムダひとつないスピード展開でブロンズ・メダルへ駆け上がりました、おめでとう!! 特別賞:色が違うで賞(お供えの花って白じゃね!?)		
		13 pt	2 位	0 sp
B07	真っ赤な花畑	こちらの赤は彼岸花。 臨死体験。白いベッドとの対比で、くっきり印象的な仕上がりです。 あの世という意表を衝いた場面設定がヒットして、シルバー・メダルの栄冠です。おめでとう!!		
		4 pt	9 位	2 sp
		へただけ残ったカラッポのお弁当箱。友人とまと君の赤		

B08	花よりトマト	いほっぺ。ディテール描写のじょうずな作者さんです。もちっと読みやすいフォントだともっと映えたのに、そこが残念。そして、幸平くんの謎！？ 特別賞：トマト嫌いの気持ちを表現したで賞 誰ですか賞（後ろから3行目の幸平が誰なのか気になったから。）
B09	陽だまりの部屋	3 pt 11 位 0 sp ちいさな一輪が机上を明るく照らしてくれます。さりげない幸せ、まさに陽だまり気分をそのままふわりと届けていただきました。 イチオシフレーズ：「薔薇だったら、自分の机には置けなかった。」「午後の最後の西日を受けて、そこだけ時間がゆっくり流れる。」
B10	入学式	11 pt 4 位 2 sp おー、すごい！ エコーのように敗者の叫びがこだまします。敢えて同じフォントにしたことで、今日の勝者は明日の敗者、そんな連続性まで表現しようとしたのかも？ 特別賞：対賞（称）（幸と不幸の人、2者の対称がひじょうにすばらしい。）コクうま賞（ほかの作品に比べてコクがすごくあったから。）
B11	初恋	7 pt 5 位 0 sp ぐしゃり。潰してしまえば、ほらもう僕だけのもの。黒い独占欲が、画家というシチュエーションにしたことで、とても自然にリアルに伝わってきます。こわいなあ。 イチオシフレーズ：「ぐしゃりと君を踏み潰す。」「これできみは、ぼくだけのものだね。」
B12	ハックション	7 pt 5 位 10 sp ラストは盛大に吹き飛ばして。 まあたしかに不条理ですよね。花は花の世界だけで営業してほしいもんだ、と切実な願いとともに今週の読み納めです。 身近な話題に思い切りの良さが加わって人気集中、「花粉賞」5つなど、なんと圧勝の最多特別賞でした。今週のイチオシフレーズ大賞のおまけつきです。おめでとう!!! 特別賞：レイアウト賞（レイアウトが良い。）ウィキペディア見ま賞（きっと書いてあるから。）共感できるで賞（花粉症の人数）花粉賞×5（インパクト大/共感/ゴロが良い）ズズズ（注鼻をすする音）賞（花粉症の気持ち、分かるから）ハック賞（人気） イチオシフレーズ：「チーン（注鼻をかむ音）」「ハックション」×3